
活動報告小話集。

ゆずはらしの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

活動報告小話集。

【Nコード】

N9898P

【作者名】

ゆずはらしの

【あらすじ】

活動報告で、たまにミョーな話を書いていましたが、増えて来たのでまとめてみました。おバカさんな話がほとんどです。自作品のパロディの他に、童話やら何やらあります。新年の福袋的に読んでいただければ幸いです。（活動報告にあった時より、読みやすいよう修正を入れています。）

わたしのブログ、アトリエゆずはらしにも、載せてある文章です。

BLに挑戦。(妖精たちのいるところキャラ)

煮詰まりました。

妙なギャグばかり出て来るのに、本編進まない。

そういう訳で、(どういう訳) BLに挑戦してみました。ただし、ゆずはらの書く物ですので、あんまり期待しないように。

『妖精たちのいるところ』キャラでBLに挑戦。
サブタイトル、「桂まゆさんデビュー良かったね記念SS」

……こんなのデビュー記念にもらっても、あんまりうれしくないかも。

登場人物

瀬尾隆志

トリスタン

触手

☆★☆☆

隆志は眉間に皺を寄せ、目の前でうごめく、ぬるつく群を見下ろ

した。

触手だ。

どう見ても触手だ。それが山ほどいる。

穏やかな日差しと緑美しい妖精郷に、それは恐ろしく不似合いに見えた。

「ってかこれ、どうしろって言うんだ」

「私の配置もよくわからないね」

トリスタンがにこやかに言った。白い妖精の騎士は、隆志と触手を見比べた。

「鬼畜、という役所らしいが。私の役はただ、君達を見ているだけのようだ」

「見てるだけ？」

「そうらしい。見るより、する方が楽しいと思うのだがね」

「するって何を……や、良いから。言わなくて。で、何なのコレ。

俺は何すりゃ良いわけ」

「その触手と戯れれば良いらしい」

「戯れって……」

うねうねによるよるずるずる。

何かを期待するように、触手が一斉に震えた。隆志の眉間の皺が深くなる。

「ヤなんだけど」

「君が動かないと、話が終わらないよ」

「見てれば良いだけの奴は、楽で良いよな」

「私もそう思うよ。何なら、私と逃避行するかね？　せっかく出て

来たそれには悪いが」

「悪いなんて、微塵も思っていないくせに白々しい。放置して大丈夫なのか、これ。って言うか、何なの、こいつ」

「人の想念が凝った物さ。主に女性」

隆志が沈黙した。次の瞬間、愕然とした風に叫ぶ。

「女の子がこんなモン、何で想像するの!？」

おそらく、腐のつく女性たちの物であろう。しかし女性に何やら夢を抱いている隆志には、衝撃が大きかったらしい。

「はあ。まあ良いけど。でもさ、逃げられるの？　なんか俺、ロツクオンされてるっぽいんだけど」

触手は明らかに、隆志に狙いを定めていた。隆志が右に動けば右に、左に動けば左に、一斉にうぞうぞとうごめく。

「この想念が生まれた目的は君だからね。ああ、大丈夫。放置しても別の誰かを区別なく襲うだけで、満足したら消えるよ」

「それじゃ、逃げられないだろ!」

うがーっと叫んで髪を掻きむしると、隆志は顔を上げた。

「俺が相手してやりや良いんだな……ああもう仕方ない」

「相手をしてやるのかい」

「うん、もう良いや。考えるのめんどくさい」

そう言うのと躊躇なく、ずかずか触手の群の中に歩を進める。

どかつ。

ぎゅむっ。

べしっ。

思いきり蹴飛ばし、踏み付けながら。

「容赦がないねえ……」

「コレに容赦する必要があるか」

どかつ！

押し寄せた触手を回し蹴りで地に這わせると、口の端を上げ、不敵な表情で隆志は言った。

「相手してやるとは言ったがな。優しくしてやるなんて言ってないぜ」

その瞬間。

ぶるぶるぶるぶるっ！

触手の群が一斉に震えた。

「何？」

「あゝあ。スイッチ押しちゃったよ、君」

なぜか頬を染め、トリスタンが言った。

「は？ スイッチ？」

「わからなくて良いから。がんばってね」

「え……うおわっ！」

いきなり勢いを増して押し寄せ出した触手を、隆志は蹴り倒し、踏み付けた。げしげし踏み付け、踏み付け、踏み付ける。勢いは良いのになぜか、触手たちは呆気なく倒される。

倒されてもまた起き上がり、踏まれに行くのだが。

「まだ来るかっ！」

どかつっ！

「しつこいんだよっ！」

がしがしっ！

「寄るな触るな気持ち悪イイイイイツ！」

どけぐしゃがしっっ！

蹴倒され、踏み付けられ、罵倒されて触手は、ふるふると震えた。

「がんばれー」

生温い笑みを浮かべてトリスタンが言う。ぜえぜえと荒い息をつきつつ、振り向いた隆志は、ぎっと睨み付けて叫んだ。

「がんばりたくないわ、こいつら、Mかーッッッ！」

叫ばれ、隆志の足の下で触手が震えた。心なしか、恍惚としているようだ。

「だからさっき、スイッチ入ったって言っただろう？ さっきの微笑がやっぱりねえ。色っぽくて」

「俺に色気なんかあるかーッ！」

「えゝ？ あるよ。私でもドキドキしたもの。免疫ないお嬢さんがたには、衝撃だったと思うよ」

「何の衝撃！？ 何の！？」

「蔑む眼差しに冷笑。優しくしてやれない、なんてセリフ言われたらもう……お願い、もっと蔑んでゝ！ って言いたくなるよ」

「おまえらの趣味に巻き込むなッ！ 俺はノーマルだーッッッ！」

げしげしげし。

悶える触手。踏み付ける美青年。眺める鬼畜設定らしい、妖精騎士。

「なんで俺の周りはMばかりっ！ 寄るなって言ってるだろ、馬鹿触手ッ！ 何が楽しいんだ貴様らーッッッ！」

「君の資質の問題じゃないかね」

もう嫌だーッ！ と泣きながら踏み付け続ける隆志に、トリスタンはぼそりと言った。だって君、なにげに女王様気質だし。

「まあ、あれだ。足の裏には、ツボがたくさんあるらしいし」

「青竹踏みかいっ！？」

「体には良いのではないかね？」

「精神には大打撃だよ！ 自発的に踏まれに来る青竹の群だぞ、しかも喜ぶんだぞ、踏むと！」

確かにあまり、見たいと思うような物ではない。

トリスタンはちよつと、首をかしげた。
そして、言った。

「ファイト」

「それだけか!？」

何気に鬼畜である。方向性がちよつと違っているが。

「そういう奴だよおまえは!　だあもう、寄るんじゃない泣くぞ俺
はあああああッ!」

げしげしげし。

「平和だねえ」

トリスタンは微笑んだ。妖精郷はとりあえず、今日も平和だ。

f i n .

※禁断の、触手受け。

／　　そういう訳で!　　桂まゆさん電子書籍デビューおめでとう(^ O ^)

存在意義が健康サンダルな触手ですが、もらって下さい!

2009年12月18日活動報告「突発小話。BLに挑戦。」桂ま
ゆさんに捧ぐ」より

いきなり次回予告。(妖精たちのいるところキャラ)

いきなり次回予告。

…というサイトがあります。名前を三人入れると、自動的に次回予告を作ってくれるという。

桂まゆさんのRPG企画で、コレ使って遊んでました。RPGの内容自体は、『青天の霹靂』という小説になって連載中。

ゆずはらは登場人物の一人をプレイしています。

で、時間のあいた時に、次回予告作って、SS書いたりしてました。その辺りは、桂さんのRPG用掲示板、『月下の宴』に載ってます。

それはさておき。

自分の作品の登場人物で次回予告してみたら、どんなだろう。

…と、思ってたやってみました。

『妖精たちのいるところ』キャラで次回予告。

☆☆☆

まずは、隆志とトリスタン、ケルピーで。

『隆志とトリスタンとケルピーはいつも仲良し三人組！しかし、トリスタンは世界を救う為に旅に出てしまう。しかも隆志はある事件がきっかけで村から追い出されてしまう！はたして隆志はトリスタンに追いつき一緒に旅をできるのか！？次回！君と響きあうRPG「まっつてよ隆志！置いてきぼりのケルピー」忘れずに見てくれよな！』

置いてきぼりのケルピー（笑）。仲良し三人組。しかも響きあっちゃうのか。

次。隆志とアーサーとケルピー。

『魔法使いのオネーサンから買った1粒5万円の“恋がかなうアメ”なんとしてもこれを憧れの隆志に食べてもらわなくっちゃ！アーサーが勇気を出して渡したのに隆志はアメをケルピーにあげちゃったからさあタイヘン！どうなる？ドキドキアーサーの恋☆オウエンしてねっ！』

…なんかビミョーに、小説本文とかぶってる気がしないでもない？

次。トリスタンとケルピーとアーサー。

『最強の敵怪人ケルピー！絶対絶命のアパッチ戦隊アーサー！そん

なの彼らの前に迷い込んだ少年トリスタン彼らは少年トリスタンを
守れるのか！？次号、「黄色はカレー好きから女性」お楽しみにッ
！」

……うんんん。いや、トリスタンを守れて……。

アーサー、トリスタン、ケルピーで再挑戦。

『なんと、ケルピーの正体は龍だった！？龍と戦う者である親友の
アーサーはどうするのか！？そしてトリスタンの正体とは！？次回、
「私は人と共に生きれない」ケルピー、どうして……』

いや、おまえ水棲馬だろ、龍じゃなくて！？

最後に、隆志、トリスタン、ケルピーで再挑戦。

『トリスタン「なあ、ファイファンってなんだ？」ケルピー「え？
ファイさんの ファンじゃねえの？」トリスタン「ファイって誰？」
ケルピー「さあー？」次回！『何故トリスタンとケルピーはFFの
ことだと気が付かないのか！？』『ファイとは隆志のことだった！
？』の2本でお送りします！まで次回♪』

ファ●ナルファンタジーネタでした。隆志がファイさんって（笑）
みんな隆志のファンって事？

いろいろ笑えました

2009年11月03日活動報告「いきなり次回予告（妖精たちの
いるところ）。」より

自給、あるんですか。（永き夜の大陸小話）

※ 「小説家になろう」登録一周年記念として、活動報告に書いたものです。

しばらく小説を書いていなかったの、書き方忘れてしまっています。

とりあえず、リハビリ中。

……おバカさんな話は、ぼろぼろ出て来るんですが。次回予告劇場とか。

前の日記にも書いた、「いきなり次回予告」のサイトを使ったお遊びで。三人のキャラクターの名前を入れ、出てきた次回予告から、ショートストーリーを書くと言う。

すごい変な話になります。

何書いてんだ私。というカンジになります。

笑えるけど。

……。

まあ、一周年だし。記念という事で。内輪ネタSSになります。

『永き夜の大陸キャラで、次回予告劇場』

おヒマな方のみ、どうぞ。ただし、本編のイメージが崩れても、私は責任持ちません☆

☆★次回予告劇場☆★

「新・いきなり次回予告」サイト様から。

『時給、あるんですか』

ユーラとガイリスは遊園地でデート。お化け屋敷に入った2人はとんでもない目に……！なんとそこにはユーラの元恋人氷玉の姿が！恐怖のあまり声もでない2人、それを嘲笑いながら見ている氷玉。次回予告「氷玉は時給710円でバイト中」「鎖骨フェチなユーラ……！！」「実は30代前半のガイリス！？」「この3人の運命やいかに！？来週もみてね……！！」

……うわ怖。コレで話書けてちょっと（汗）

やってみよう（↑

ちなみに登場人物は、

ユーラ：人族、薬師の娘

氷玉（月牙伯爵）：闇魔族

ガイリス：ユーラに従う半獣族の少年

紫忌（白男爵、人間名ローク）：人間の血を引く氷玉の弟

『時給、あるんですか』

「ねえ、ガイリス。遊園地って不思議な所ね。初めて見たわ」

珍しげに周囲を見回すユーラ。

「あっ、あれは何？」

「乗り物のようですね」

「なぜカップの形なのかしら」

「お気をつけ下さい、ご主人さま。何かのまじないかもしれません。妖獣が背後にいて、乗った者の生気を吸い取って、ぐいっと飲んでしまうのかも」

遊園地のコーヒークップに、そんな能力はない。

「でも何だか、楽しそうに乗っているわよ？ 家族連れの人たちとか」

「擬態して油断を誘う妖獣もおります。ああ、あれは！」

メリーゴーランドが、くるくる回っている。

「生きた馬を細胞レベルで木質化するとは、なんと酷い！ しかも

それを、見世物にするとは！」

「ええと……コレ最初から、この形に作った人形じゃないかしら……」

遊園地初心者の二人は、それでもそれなりに楽しく過ごしていた。

「まあ。これは何？」

「きやらめるあじ、のぼっぶん？　だそうです」

「美味しいわ。ほら、ガイリスも食べて」

「えっ、あっ、あのっ、……ありがとうございます（真っ赤）」

何やら初々しい。

記念のプリクラも撮り（宝物にしようとかガイリスはひそかに決意した）、さて、次はどうしようと思っていると、お化け屋敷が目に入った。

「あら？　何かしら、ここ」

「よお。カップルなら入るべきだぜ、ここは！」

「あら、ローク。何してるの」

呼び込みの兄ちゃんを見て、ざあっと青ざめるガイリス。

「ひえっ！　は、白だんしゃ……」

「その名を口にするな、小僧（ぎろり）」

「あああ、すみませんすみません（あわあわ）」

「ちよっと、ローク！　ガイリスを怖がらせないで！　それで、何をしているの？」

「ああ、すまん（↑全然済まなそうじゃない）。俺はこれでも傭兵だ。今は雇われて仕事中！　そういう訳で、呼び込みをやってる

！」

そんな仕事までするのか、傭兵。

「入ってくると、ヒッジョーにありがたいッ！」

「そう？ それなら入ってみましょうか……ガイリス？」

「なな何だか、すっごい嫌な予感がします……」

「えゝ？ 作り物だぜ、中の化けモンは。半獣なら平気だろ。なあ、お嬢ちゃん？ ……？ どこ見てるんだ？」

「ローク」

「あ？」

「どうしました、それ」

「あ？ ああ。コレか、たいしたことない……でうわっ！？」

いきなり紫忌の胸元をがばっと広げ、鎖骨を眺めるユーラ。

「うひえ！？」

「火傷？ ろくな手当てもしないで、あなたという人は！」

「いや俺、回復は人族より早いよ、生粋の魔族ほどじゃないけど……でえっ！？ 触る！？ そこで触る！？ よ、よせ、ちよっぴりうれしいけど、兄上に殺されるゝッ！！！」

問答無用ではだけた胸に軟膏をぐいぐい塗られ、紫忌は涙目になった。

「入るんなら入ってくれえ！ そして俺を一人にしてゝッ！」

「ご主人さま……薬師として見過ごせないのはわかりますが、もうその辺で……」

「ありがとう、坊主！ おまえの気遣い、年期入ってるカンジで涙出る……」

お化け屋敷の中は、薄暗かった。

「足元、お気をつけ下さい」

「ガイリスは見えてるの？」

「多少は。半獣ですので……！？」

何だ。

ものすごいプレッシャーを感じる……ッ！

「ご主人さま！ 俺の後ろに！」

「えっ！？ な、何……ああっ！」

バリバリバリバリ、

どっかーんっ！

「雷！？」

「きゃ…ッ！」

「ご主人さまッ！」

ざあっと走る、黒い影。悲鳴と共に、ユーラの姿が消えた。

「ご主人……ああッ！」

ガイリスは青ざめた。

「ちょっと氷玉ッ！ どこ触ってるのッ……！！」

ぴしゃーん！

マントを広げてユーラをさらった月牙伯爵が、胸に触ったとか触らないとかで、真っ赤になったユーラから平手打ちを受けていたからだ。

「姫。私を置いて、そこな半獣と出かけるとは……」

ぎろり。睨まれてガイリスは震え上がった。怖い。無茶苦茶怖い。

「だってあなた、太陽の出ている時間帯は、外に出られないじゃない」

「姫の為ならば、この身が焼けただれでも悔いはない。一言あらば、供をした」

「燃え出すあなたを横にして、楽しく過ごせる訳がないでしょう！？」

「瑣末な事は、気にするでない」

「気になるわよ！？」

「ふ。姫は優しいな」

「普通だから私の反応は！」

そこでユーラは、はたとなった。

「待って。日中よ、今。どうして眠らないで平気なの」

氷玉は「チョー強力！ 日焼け止めMAX」を取り出した。

「まあ。成分は？ 何で出来ているの！？」

いきなり目を輝かせるユーラ。

「欲しいのであれば、用意させる」

「えっでも高価な薬じゃ」

氷玉は胸を張った。

「ここの『ばいと』とやらの必要経費に入っているのだ。ちなみに時給は710円だ」

……。

ガイリスは耳を塞ぎたくなった。闇魔族の誉れたる月牙伯爵が、時給なひやくじゅうえん……。

「働く事は大切よ。頑張ったのね」

ユーラはしかし、にこりとして言った。

「うむ。紫忌が持ってきた仕事なのだが。なかなか興味深い」

「そうなの」

「やって来る者に、雷を落として見せれば良いだけなのでな。つまらないほどだ」

「つまらなくても、必要としている人がいるのですもの。やり遂げるのは、大切な事よ」

「うむ」

何だか良い話になっているようだ。

うなずいた氷玉だったが、次の瞬間、いきなり胸元をはだけた。鎖骨を出してくる。

「!？」

ぎゃーッ！ 伯爵さま、何コートマンしてるんですかーッ！

内心叫んだガイリス。しかしユーラは動じなかった。

「どうしたの？」

「私も怪我をした」

「そうなの？」

「紫忌ばかり、ずるいではないか。薬を塗って欲しい」

なんじゃそりゃー！ ガイリスは声に出さずに突っ込んだ。生粋の魔族が怪我なんかしたって、一瞬で治ってるでしょうがーッ！

「どこ？」

しかしユーラは真剣な顔でのぞきこんでいる。騙されてる！ 騙されてます、ご主人さま！

「暗くてわからないわ……」

「案ずるな。われらは回復力が強い。ただ、そなたの手で触れて欲しいだけだ」

「触ると痛いでしょう？ ああ、そんな顔しないで。軟膏の残りがあから」

「それで良い」

だから騙されてますってば、ご主人さま！

「だ、」

「まあ、あれだ。気にすんな」

ぽんと肩を叩かれ、振り向くと紫忌がいた。

「男爵さま」

「気にするだけ負けだ。ハゲるぞ。あれはあーゆーモンなんだと思
つとけ」

「……そうですね」

ガイリスは深いため息をついた。

「バカッフルにツッコミ入れても虚しいだけですものね……」

「すげえしみじみ言ったな。哀愁漂ってんぞ」

「ふふふ。ご主人さまはわが道を行かれるし、伯爵さまは俺様だし、
間に挟まれた俺は、俺は、神経擦り減らすのが日常なんですよッ。
今日は、今日だけは気楽に過ごせると思ったのに……」

ああ、でも俺には、このプリクラがある。うなだれてそうつぶやく
ガイリスに、まるで悲哀に満ちた中間管理職のようだと紫忌は思っ
た。疲れて仕事から帰ってきて、一人でぽそぽそご飯を食べる、リ
ーマンのお父さんのようだ。

とりあえず、生鎖骨を触ってもらって、氷玉は満足したらしい。バ
イト代から、記念キーホルダーやら、イチゴ味のチュロスやらを購
入し、満足そうにユーラに貢いでいた。

一日限りだったえらいイケメンと、めっちゃめっちゃリアルな雷の演出は、その遊園地でその後、伝説になったという。

F i n .

2009年11月19日活動報告「リハビリ。一周年記念SS」より。

新境地RPGバトン☆（永き夜と精霊の騎士キャラ）

なんだかめまいがすると思ったら、風邪でした。

嫌ですね、夏の風邪。ただでさえ暑いのに。と言うか、なんでもう、風邪ばかり引くんだ私。気をつけてるのに。

そういう訳で、ネットをフラフラしていたら、面白いのを見つけました。

新境地RPGバトン☆

なんか笑った。

なので、うちのキャラクターでやってみました。

新境地RPGバトン☆

以下の項目にお好きなキャラ名等を当てはめ、文中に出てくる「」に置き換えて下さい。

【登場人物】

- [1] ∴ ユーラ（永き夜）
- [2] ∴ ガイリス（永き夜）
- [3] ∴ 氷玉（永き夜）
- [4] ∴ ラルフ（精霊の騎士）
- [5] ∴ クリス（精霊の騎士）
- [6] ∴ グレイ（精霊の騎士）

[7] …紫忌（永き夜）

【道具】

[A] …毛糸のショール

[B] …薬草

[C] …ドレス

[D] …畑仕事道具一式

【場所】

[あ] …田舎町の一軒家

[い] …大衆食堂

[う] …辺境の搭

【その他…体の一部】

例…つむじetc

【※】 …右足の親指

●「田舎町の一軒家」に住む「ユーラ」はある日突然伝説の勇者の末裔であると言われ、「大衆食堂」を根城にする魔王「ガイリス」を倒し、囚われの「氷玉」を救出するよう頼まれる。

ユーラ「どうして魔王が大衆食堂にいるの」

ガイリス「俺！？ 俺が魔王！！？」

氷玉「ほう。私は囚われの身なのか。それは興味深い」

ガイリス「いや絶対ミスキャストですから伯爵さま！ 大体、どうやったら俺が伯爵さまをつかまえたりできるんですかーッッ！ ムリ！ 絶対ムリ！！！！（涙目）」

●道中、剣士「ラルフ」と魔法使い「クリス」と踊り子の「グレイ」が仲間に加わった。

グレイ「俺が踊り子〜〜ッ!!?!?」

ラルフ「俺の役割は、まあ妥当だけど。グレイが肌、露出して踊るのか…」

グレイ「まだ小僧が、ヘソ出しスケスケ衣装を着た方がマシだろおおうッ!!?!?」

クリス「えっ(汗)」

ラルフ「何て事を言うんだ、グレイ。クリスにこんな破廉恥な格好をさせられるわけがないだろう。君ならいつも、変身するたびに裸になっているし、問題ないだろう?」

いや、問題あると思う。

グレイ「変身で仕方なく裸になると、常時踊り子服を着て歩くのでは、問題の質がぜんっぜん違うでしょうがッッ! 俺は心身共にフツの男の範疇に入る、成人男性なんですよッ」

クリス「精霊憑きって、フツの男の範疇はんちゅうに入るんですか?」

グレイ「その辺スルーで」

そこでラルフが真顔になった。

ラルフ「グレイ」

グレイ「何スカ」

ラルフ「俺は、クリスの肌を人目に晒さらしたくはない。だから君に、犠牲になってもらいたい」

言い切った。

グレイ「真面目に言ってるけど、発言さりげなく鬼畜ですよ、ラルフさま」

クリス「あの：笑ったりしませんので」
グレイ「だったらお前が着てみるや、あア？」

グレイは完全に、やさぐれている。

ラルフ「（さわやかに）大丈夫だよ、クリス。グレイはきっと、素晴らしく着こなしてくれるさ。それこそ、生まれた時から着ていたかのように」

グレイ「……俺をどん底に落として、何か楽しい事でもあるんですか、あんた！」（泣きながら走り去る）

クリス「あゝ：（気の毒だとは思っているが、自分が着たら性別がばれるので、何も言えない）」

ユーラ「ええ」と：あの。勇者のユーラです。よろしく願いします：？（今まで声をかけられなかった）」

●「ガイリス」を倒すには伝説の武器「毛糸のショール」が必要で、そのためにはまず「薬草」を手に入れて「辺境の搭」への道を開かねばならない。

ラルフ「大衆食堂に行く為には、まず辺境へ」

ユーラ「何か間違ってるわね、いろいろ：」

グレイ「ちくしょ。踊ってやる」

それなりに筋肉質な体にスケスケ衣装。しかもヘソ出し。ヤケになっただけグレイがひらひらと踊る。

全員無言。

●手に入れた「葉草」を掲げ「クリス」が祈りを捧げ「グレイ」が舞を舞うと、「辺境の搭」への道は開かれた。

グレイ「オラオラオラッ！ 俺の美しい踊りを堪能しやがれッ！！」
クリス「ノリノリですね」

グレイ「ノリでも何でも良くしとかないと、やってらんねーんだよ！！！！」

ユーラ「……（痛々しさに、そっと涙をぬぐう）」

ラルフ「あゝ、ほら。ワープゲート開いたぞ。グレイのおかげだな。これからも頼むよ！（爽やかに笑いながら）」

グレイ「鬼畜だ…鬼畜がここにいる…」

●「辺境の搭」で「毛糸のショール」を手に入れた勇者一行は「大衆食堂」へ向かうが、とある町で「グレイ」が運命の相手「紫忌」と出会い、戦列を離れる事に。

「ユーラ」は「紫忌」に母親の形見の「ドレス」を贈り、「ラルフ」と「クリス」は友情の証に「畑仕事道具一式」を渡した。

グレイ「（ざーっと青ざめながら）俺の運命の相手が、このガタイの良い兄ちゃん……」

紫忌「よろしくな。俺の出番はこれだけなのかい、お嬢ちゃん」

ユーラ「そうみたい。はい、ドレス。男の人でも着られるように、サイズ直しといたわ」

紫忌「いや、俺は着ないし。おい奥さん。フツの家庭に入るんだし、ヘソ出しやめてこっち着てみろや」

グレイ「限定！？ 俺限定なのドレス着るの！？」

クリス「あの、グレイ。畑仕事道具一式です」

ラルフ「新しい生活に役立ててくれ。もう一人の体じゃないんだし（爽やかに）！」

クリス「ちょっ、ラルフさま」

グレイ「……………。お、」

全員「「「お？」」「」」」

グレイ「俺の踊りを見ろやああゝゝッ！！！！！！」

ビリビリビリビリ！

服が弾け飛び、馬に変身したグレイは泣きながら駆け去った。

ユーラ「見ろって…今の、走って逃げただけじゃ」

●魔王「ガイリス」の待つ「大衆食堂」へ到着した一行は、囚われていた「氷玉」を救い出し、魔王「ガイリス」の弱点が「右足の親指」であることを聞く。

ラルフ「大衆食堂だ」

ユーラ「大衆食堂ね」

クリス「異様に繁盛していませんか？ 本当にここに魔王が……」

昼のエビフライ定食六百円』」

ラルフ「安いな。エビフライにサラダとフルーツ、吸い物の碗とライスつき」

ユーラ「『女性に人気のランチプレート、チョコレートムースつき八百円』。蒸し若鶏のハーブソースあえ、ハトムギ入り温野菜サラダ、ポタージュスープ」

クリス「『トーフの温野菜サラダセット六百円』。フォカッチャと

スープつき。……入ってみましょうか」

中では魔王ガイリスが、料理をしていた。

ガイリス「いらっしやい！ ……ああ、ご主人さま！」

ユーラ「今は勇者」

ガイリス「あ、そうでした。勇者さま！」

魔王に様付けされて呼ばれる勇者。

ユーラ「氷玉はどこにいるの？」

ガイリス「地下室です！」

即答。

クリス「さらって閉じ込めているのですか」

ガイリス「いえ、伯爵さまは基本、日光に当たれないんで。自発的に棺桶に入ってます」

自発的に地下室に行き、棺桶に入る、さらわれた（はずの）人質。

ラルフ「それで君は何をしているんだ」

ガイリス「や、ちょっと暇だったんで、食堂の手伝いを。そしたらなぜか、大繁盛しちゃいまして。あ、勇者さま。ランチプレート、オススメですよ！」

ユーラ「わかるわ：ガイリスの料理は美味しいのよ」

クリス「そう言えば昼時ですね」

ラルフ「いやしかし。人質を救出しないと」

ガイリス「あ、それ、夜まで待って下さい。伯爵さま、夜じゃないと起きて来られないんで。大丈夫、日が沈んだら、地下室の棺桶か

ら出て来ます！」

それは本当に人質なのか。そっちの方が魔王っぽい気が。

ガイリス「すいません！ オムライス五人前とエビフライ定食三人前、トーフサラダセット三人前にランチプレート四人前、作らないといけないんです！ お話はまた、後で！！」

どっと客が入ってきて、食堂は満員になった。見かねたユーラとクリスが手伝い、ラルフもお運びをやらされ、昼時は過ぎた。

夜。

氷玉「姫。離れていた時間のいかに長かった事か。そなたの来るを待ちわびていた」

ユーラ「寝ただけでしょう、単に。ガイリス、大変だったんだから。あなたの配下に命じて、手伝わせるぐらいしたら良かったのに」
ガイリス「そそそんな！ 畏れ多い！ 俺、頑丈だから大丈夫です、一人でも働けます！ 勇者さまが来るまで、ずっとそうしてましたし！」

クリス「ラルフさま…魔王が健気に見えます」
ラルフ「俺もだ」

●「ユーラ」は「ガイリス」の「右足の親指」に「毛糸のショール」を突き刺した！「ガイリス」は滅び去り、世界に平和が戻ったのだ！

クリス「右足の親指って、ピンポイントですね」

ラルフ「小指だと、ぶつけた時にかなり痛い」

ユーラ「それよりどうやったら、シヨールで突き刺せるの」

氷玉「簡単な事だ、姫。貸してみよ」

ぴきーん。

シヨールは凍りついた。

氷玉「先は尖らせておいた。では見本を示そうか」

ガイリス「いやそれ、マジに痛いです、ってか、本気出さないで死にますから伯爵さまやメテ~~~~!!!!」

●囚われの「氷玉」は実は隣国の姫で、「ユーラ」についてゆきたいと言います。「ユーラ」は何と答えますか？

ユーラ「何を言えば」

氷玉「姫」

ユーラ「いえこの場合、あなたが姫だし」

クリス「地下室の棺桶に潜み、夜になったら現れる、魔法も使えてあっさり魔王を退治してしまった、さらわれた（はずの）隣国の姫……」

ラルフ「違和感ありまくりだな」

氷玉「何も言わずとも良い。姫。そなたのいる所が、私の居場所。

私のあるべき場所だ」

ユーラ「え」

ばさああっ！

ガイリス「わあっ、ご主人さま〜！？」

隣国の姫は、勇者をさらって消えた。

クリス「ハッピーエンド…？」

ガイリス「置いてかないで下さい、伯爵さま！　ご主人さまも〜！！（泣）」

泣きながら、走って追いかけてゆく魔王ガイリス。

ラルフ「まあ、ハッピーエンドなのじゃないかな（さりげなく、クリスの肩を抱いている）」

このままでは二人きりだ。危険が危ない。気づけ、クリス。

終わり。

●「ラルフ」の口調で回す人を指名して下さい。

ラルフ「俺ですか？　ブログリボタン、という所にあるボタンだそうですね。よろしければみなさん、楽しんで下さい」

2010年08月11日活動報告「更に逃避。〜新境地RPGボタン☆による小話。」より

異文化は美しく交流する。

レポート山積みです。ちょっと体調崩して横になっていたら、山になっていた。

……文字を見ると、めまいと吐き気が止まらない状態だったんだよ……。

ちよつとずつやろう。ちよつとずつ。

それでも気持ちを新たにしたり、決めた事とかあるので。まあ、何とか。立ち直れそうです。

棚をつけよう！

とかね。必要だよ、棚。

と、いう訳で、ストレス発散小説。連載中のものに取り掛かれないんで、そっちのストレスもあったりする。横になっていた間、頭の中でぐるぐる考えていたネタでもあります……、

おバカさんな話書きたい！ の一心で出来た話です。ではどうぞ。

☆★☆☆

美しい緑に囲まれたそこは、のんびりとした校風がうたい文句の、

中高一貫教育が行われる私立の学校だった。

私立A花学園。えいか

やまだ けいこ
山田圭子

15歳は、この学園の高等科一年D組に所属する、ごく普通の家庭で育った、平凡な少女だった。運動神経はそれなり。成績は可もなく不可もなく。自分ではちょっとは可愛いのではないかと思っているが、アイドルのような美人という訳でもない。

それなりで普通。

それが彼女の、自分自身に対する評価だった。それで良いと思っていたし、そんなものだとも思っていた。

毎日は、少しばかり退屈で、けれど平穏に過ぎてゆく。

そんな日々が続くのだと思っていた彼女に転機が訪れたのは、とあるニュースを友人から聞いてからだった。

「おはよう、ケイちゃん、知ってる？ 交換留学生が来るんだって！」

朝、登校して教室に入ると、友人の田原直美たはら なおみが近寄ってきてそう言った。

「おはよ、ナオ。交換留学生？」

「うん、うちの学園、どっかの国と姉妹校じゃない？ で、時々、生徒を交換で留学させるの。うちから何人か向こうに行って、向こうから何人か来るわけ」

「へ〜……」

高校からこの学園に入った圭子には、初耳だった。

「うちのクラスだったら良いね〜。ハンサムな男の子だったらウレ

シイな☆」

「そんな小説みたいな話、あるわけないじゃない」

そう言いつつ笑っていると、チャイムの音が響いた。HRの時刻だ。慌てて自分の席につく友人を見やり、圭子も席についた。

やがて、担任の教師が入ってくる。

ざわっ。

教室内が、ざわめきで満たされた。彼に続いてもう一人、白人の少年が入ってきたからだ。

「え、ウソ！」

「おお、留学生！？」

「うちのクラスだったの？」

「いや、カッコイイ！」

「ってか、カワイイ！」

男子生徒は珍しげに、女子生徒は興奮気味に、声を上げている。たたずむ少年はすりりとして背が高く、白っぽく見える金髪をした、いわゆる美形だった。どこかの王子様みたいだと圭子は思った。

ざわめきは収まらず、次第に大きくなってくる。担任の日向正人ひゅうが まさひと35歳は気にせず教壇に立ったが、ざわざわとして収まらない教えず子たちの様子に苦笑した。

「日直。号令はどうした」

無精ひげの浮いた、どこかヨレた服装の彼が、だるそうに言う。

慌てて今日の日直が、号令をかけた。

「あ、あ、はい、起立！ 礼〜！」

声が裏返っていた。

がたがたと音を立てて立ちあがった生徒たちは、礼を取ると椅子に腰かけた。その時、留学生の目がきらりと光り、頬がわずかに紅潮したのを、圭子は見たような気がした。

「出席を取るぞ〜。休んでる奴はいるか〜？ いたらその隣のやつ、名前を言え」

面倒臭そうに言う担任に、『今日は全員出席です』と、クラス委員の太田勉おたつとむが答えた。

「そうか。じゃ、お待ちかねの紹介だ。うちの姉妹校の、セント・Pター学院からの交換留学生。今年は三人がこっちに来了。

ジョナサン・マクファアリーだ。んじゃ、ジョナサン、自己紹介」

日向の言葉に、ジョナサンが前に進み出た。このとき圭子は、彼の目が綺麗な緑色をしている事に気がついた。

（うわあ……エメラルドみたい）

きらきらのプラチナブロンド。

神秘的な緑の瞳。

どこか冷たく感じさせられる、整った顔立ち。

（マジで王子さま……）

こんな人もいるんだ、と、ぽけっとしながら圭子は思った。

「綺麗……」

女子の誰かが思わず、といったふうにする。

ジョナサンは、背筋をまっすぐに伸ばした。

そうして、きらきらのプラチナブロンドをきらめかし、
白い頬をわずかに紅潮させながら、唇を開いて言った。

「オッス！ オラ、ジョナサン！ オラ日本好きじゃ、ガハハ、ダ
ッセエ、よろしくな！」

……………。

針が落ちたらその音が聞こえるのではないかというぐらい、圧倒的な沈黙がその場を支配した。

「アニメとマンガで、日本語を学んだそうだ」

日向が言った。ジョナサンは続けた。王子さまな美貌をほんのりと色づかせ、色香を感じさせるほどの表情で、嬉々として。

「ジャパニメーション、サイコウ！ ニンジャ、サムライ、オラ大好きじゃ！ カ〜〇〜ハ〜メ〜ハ〜！」

しぐさまで、忠実に再現していた。

そうして王子さまなのに残念な彼は、きらきらしい笑顔を浮かべると、手を合わせ、すんなりとして美しい指を組み、両の手の人差し指だけをぴんと立てる、忍者がよくやる例の印を組んだ。

まさか。

教室中が緊張した。まさか。

やるんじゃないだろうな、やるかもしれないけど、いやでもやめてくれ！

そんな生徒たちの思いを踏みにじり、晴々とした顔で、彼は手の前につきだし、

そして言った。

「……カ○チョー！」

誰か彼を止めてくれ。生徒たちは切実にそう思った。

終わる。

☆★☆☆

以前、イタリア人の美少女に、「オッス！ オラ、クリスティーナ！（だったかな、名前忘れた）」と、挨拶されたと、どなたかが本に書いていて、それが強烈に印象に残ってました。

2010年 11月 25日活動報告「ストレス発散小説。名前は
まだない。」より

ほのかにチェリー

ボタンで比喻法と擬人法について、質問あったので、

「マグカップとトースターの桜色の恋？」

と書いたら、その話読みたいと言われました。

あゝ…ノリでしたがまあ、…やってみるか。

☆★☆☆

『比喻法と擬人法の設問からの物語。

ほのかにチェリー』

桜色のマグカップは、トースターに片思いをしていた。

陶器の自分は、熱を放つ事はない。

しかし彼は、電熱線をたぎらせ、情熱をほとぼしらせる、爽やかで熱い男だった。

どこか古風な、それでいてどこにでもいそうな、風景に埋没しがちな、無骨な男。

しかしひとたび熱くなると、その情熱で周りをも熱くする、一途な男でもあった。

がしゃん、とレバーが下がり、スイッチが入る。電熱線のうなりが低く静かに始まる。

そのうなりはやがて、ぶんぶんとした歌になり、大気を震わせながら響き、広がってゆく。

ゆるやかに大気の色が変わる。奇跡のような、その情景。

そんな彼の熱さは静かにマグカップに伝わって、冷たい彼女をも温めてくれていた。

はらはらと、ほろほろと。

日々、熱は伝わる。歌のように。

はらはらと、ほろほろと。

日々、熱は降り積もる。春の日に桜が舞い散り、降り積もるかのように。

マグカップの中に、暖かさと、切なさを降り積もらせる。

はらはらと。

ほろほろと……。

今日もマグカップは、ほのかな桜色に己を染める。

寄り添うようにトースターの側に並び、彼の歌を受け止めて、己が身を深く輝かせる。

静かに深く。

ただ、優しく。

はらはらと、ほろほろと。

花びらが、降り積もるように。

えんど。

比喩法＋擬人法。まゆさん、書いたよ！

2010年 11月 16日活動報告「リクエストあったので」より。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9898p/>

活動報告小話集。

2011年10月5日16時14分発行